

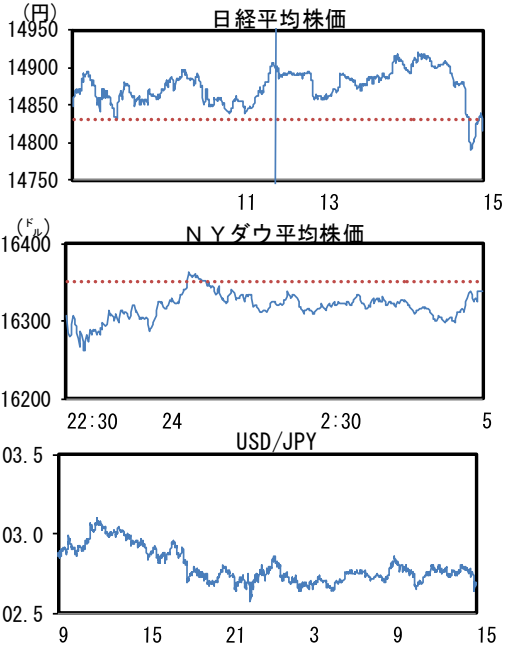
<主要株価指数>		
	終値	前日比
日経平均株価	14815.98	-14.41
N Y ダウ	16,340.08	-11.17
D A X (独)	9,188.69	-119.10
FTSE100 (英)	6,620.90	-64.62
CAC40 (仏)	4,306.26	-43.46

<外国為替>※		
	102.61 円	-0.14 円
ドル円		
ユーロドル	1.3936 ドル	0.00 ドル

<長期金利>※		
	0.644 %	0.01 %
日本		
米国	2.730 %	-0.04 %
英国	2.752 %	-0.03 %
ドイツ	1.596 %	-0.04 %
フランス	2.184 %	-0.03 %
イタリア	3.421 %	0.02 %
スペイン	3.347 %	0.03 %

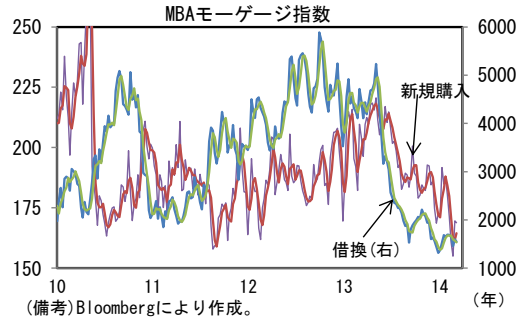
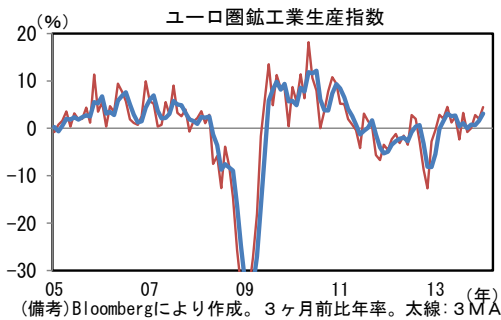
<商品>		
	97.99 ドル	-2.04 ドル
N Y 原油		
N Y 金	1370.50 ドル	23.80 ドル

※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。
(出所) Bloomberg



【海外株式市場・経済指標他】 ～ユーロ圏：生産は堅調～

- ・ N Y ダウ平均株価は前日比▲67.43ドルの16351.25ドルで取引終了。米指標の公表が乏しく、利益確定売り優勢。
- ・ 1月ユーロ圏鉱工業生産指数は前月比▲0.2%と市場予想(+0.5%)を下回ったものの、前月分の上方修正(▲0.7%→▲0.4%)を踏まえれば予想は満たされたと言える。温暖な天候による暖房需要の減少からエネルギーが減産(▲2.5%)となり全体を下押ししたが、製造業生産(+0.3%)は堅調。PMIの改善に沿った動きである。
- ・ M B A住宅ローン申請指数は前週比▲2.1%と2週ぶりに減少。もともと、新規購入は前週に9.4%伸びた後にも拘らず▲0.5%と小幅な下落に留まり、住宅販売件数の下げ止まりを示唆。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【外国為替相場・債券市場】～豪雇用統計はサプライズ～

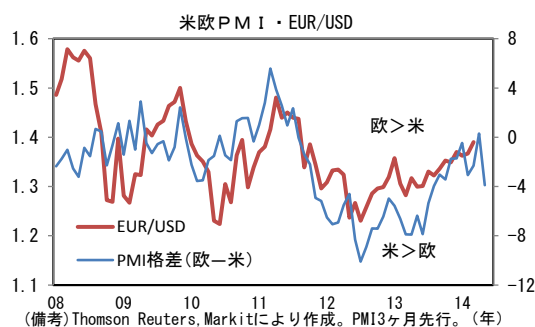
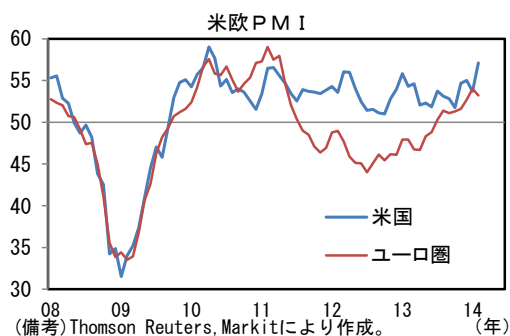
- ・12日のG10通貨は米金利が低下するなかUSDの弱さが目立った。USD/JPYは102.75をコアレンジに膠着。他方、EUR/USDは1.39をブレイク。13日オセアニア時間ではRBNZが予想どおり25bpの利上げを決定。ウィラー総裁が「融資抑制が住宅価格インフレを抑えるのに寄与」などとタカ派な見解を示したことからNZDが急伸。また豪州では豪2月雇用者数が+4.73万人（予想：+1.50万人）と非常に強く、過去分も上方修正（▲0.37万人→1.8万人）。失業率は6.0%で横ばいも労働参加率（64.5%→64.8%）は上昇。これを受けてAUDは急伸。他方、USD/JPYは15：30頃には102.60近傍まで水準を切り下げた。
- ・米10年金利はウクライナ情勢や中国経済に対する懸念から▲3.8bpの2.730%。欧州債市場はコア国堅調、GIIPS軟調。欧州株が軒並み下落するなかではGIIPS債の下値を拾う動きも限られた。

【国内株式市場・経済指標他】～機械受注：上向き基調維持～

- ・日経平均株価は前日比▲14.41円の14815.98円で取引終了。前日の反動から買い戻し優勢も、1-2月の中国経済指標が軒並み弱い内容になったことで売り優勢に転じた。
- ・1月コア機械受注は前月比+13.4%と前月（▲15.7%）から反発。製造業（+13.4%）、非製造業（+12.1%）が共に伸びた。このところ機械受注は振れが大きく基調が読みづらいが、3MAで均してみると増加しており、緩やかながらも上向き基調を維持している。一方、資本財輸出に先行性を持つ外需は+2.7%と2ヶ月連続の増加。昨年後半の勢いは取り戻せていないものの下げ止まりの兆しがみられる。
- ・1-2月の中国固定資産投資は前年比+17.9%、小売売上高は同+11.8%、鉱工業生産は同+8.6%と、いずれも市場予想（+19.4%、+11.8%、+9.5%）を下回った。

【注目点】～Mrドラギも春を待っている～

- ・EUR/USDの1.40到達が（筆者の予想に反して）時間の問題となりつつある。13日の日本時間には特段のニュースが飛び込んできていないにも拘らず、EUR/USDは一時1.395を付けて昨年来高値を突破した。ECBの追加緩和期待後退により、EURの上昇を見込む向きが投機的な買いを仕掛け易くなったのだろう。
- ・しかし、為替を決定するのは金融政策だけではない。筆者は足もとのユーロ高の原因として、ECBの消極的な姿勢も去ることながら、米欧の景況感格差が大きく影響していると考えている。EUR/USDと米欧PMIを比較すると、ユーロ圏PMIが改善をはじめた12年夏場からEUR/USDが上昇している姿が見て取れる（図はPMI3ヶ月先行）。米国の景況感が良好な水準を保つなか、欧州の景況感が追いついてきた結果だ。そこに昨年末からの「米国の寒波」と「欧州の暖冬」という間逆の特殊要因が加わったため、相対的な景況感が欧州優位となり、足もとのEUR/USDの上昇に弾みがついたと考えられる。
- ・しかし米国が寒波の逆風から抜け出し、景況感の改善が確認できるであろう4月以降は「強い米経済」と「強いドル」が意識されるはずだ。短期的にはECBに対する失望が残存し順張りのユーロ買いが持ち込まれそうだが、春先からはEUR/USDがドル高主導で下落する展開を見込む。それをECBも望んでいるはずだ。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。